# 夢は枯野を・・・

三条万里子

# 目次

ふりそそぐ光 ―― 6
反省 ―― 10
「老いる」ということ I ―― 12
言語の力 I ―― 15
言語の力 II ―― 20
言語の力 III ―― 23
「老いる」ということ II ―― 28
「老いる」ということ III ―― 31
回避 ―― 33
考える ―― 40
眠る ―― 42

初体験――――――――――――――――――――45
代謝――――――――――――――――――――48
順礼――――――――――――――――――――52
梅の忌――――――――――――――――――――56
おひな様――――――――――――――――――――58
セーフティ・ブランケット――――――――――――――――――――60
仕草――――――――――――――――――――62
「椰子の実」のうた――――――――――――――――――――64
折衷――――――――――――――――――――68
夢は枯野を・・・――――――――――――――――――――72
醍醐味――――――――――――――――――――73
そして 今・・・――――――――――――――――――――76

# ふりそそぐ光

すでに踊り手として人前から去らなければならない六十歳になろうとする頃、私は突然に文章を書くことにのめり込んだ。それは五十という数字に驚いて思わず舞台に飛び乗り、ブラームスを踊った時のよう。また四国巡礼も、予定の三十年も前に突然にお参りを始めてしまった。

早口に喋り立てる力が体の至る所で動き出し、書く速度は滑るように速くて緩まず、紙と手では間に合わない思い…。

天水が流れるようにひと息に踊りきりたい！と願ってきた習慣がそうさせるのか。

描き溜まった文章は、十年後の七十歳に初めて刊行された。今そのページをめくれば、ニューヨークと東京のこと、舞台のこと、衣裳のこと、音楽のこと、体のこと、などなどが、収拾がつかない程広がっている。

しかし、多くの先達から受けた数々の体験の記録。特にそれらの全てが、瞬間に受けた驚きの感銘であったことが目立つ。

例えば、〈マルセル・マルソーのお辞儀〉〈アンソニー・チューダーの立ち姿〉の美しさ。〈ジャコメッティの彫刻〉と〈アルビン・エイリーの即興〉の魂の奔流。〈高村光太郎・宮沢賢治の言葉の行間から〉の心、などなど。また『イカルスのように』には記せなかったが、逢うこともできなかったような歴史の偉人（ブッダ・キリスト・預言者・弘法大師）の書籍からの教示。

そこからの小さい一行の言葉によっても、猛烈に私の体に喰い込んだ。ほとんど瞬間に、そのエッセンスの光を差し込まれたように感受したのである。

その時、驚きと感動で私は号泣したのだった。

数十年の月日に思考と行動の経験を通して育まれ、まさに血肉になったことが判る。

# 反省

二〇〇二年『イカルスのように』を刊行した。以後、二十年―何度読んでも自分が自分に気圧(けお)される。盛り込み過ぎだ。しかも八十歳になって気付く。

若い頃から欲張りな私が、舞台を降りたあの時、性急に書き始め、意識も頭脳も前のめり状態。内容の詰め込み過ぎが明らかだ。

『イカルス…』を書き直したい！判りやすい文章でもっと短く…。

突然のコロナ禍と続けて戦争が始まり、一気に怒りが爆発！新たに云いたいことが溢れ出た。こんな衝動―。いつも体を実験台にしてきた過去。そのクセがまた現れ、その必要に急き立てられた。やはり人生は短すぎる―と、また慌てている。

いつの頃からか―夏が始まると不思議に私の前に宮沢賢治の童話が出てくる。『よだかの星のように』のタイトルは、その恵み…。

## 「老いる」ということⅠ

舞台を降り、踊れない体がペンをとり『イカルスのように』を書いた十年。そして夫の闘病の傍(かたわ)らで十年経つ。そして見送った後の十年。驚いたことに学生時代の独り身の頃の頭に戻っている自分を発見。

四十五年の結婚生活と家族は、そんなに重かったのか？

否、否。それが私を助けた。しかし老化する体から目は離せず、そして更に更に驚く。子供返りの速度の早さ。今、私は五歳くらいの心境。

アジアの小国、神国日本に生まれ、戦前の二宮金次郎の立つ学校で「サイタ、サイタ、サクラガサイタ…」の小学生。そして見事な戦中、戦後の食糧難、住宅難の恐怖に怯え、さらされた人生の出発点。多くの犠牲者と父母たちの努力で生き残った昭和の一桁。戦後の経済復興の混乱も只事ではなかった。

鎖国の…、明治の文明改革の…その功罪。めまぐるしく変わる社会制度、封建制を脱し、アメリカナイズした日本。しかし、どの時代にも叡智に導かれた先達のお陰で束の間の自由を享受できた世代に生まれ合わせたことを思う。

# 言語の力Ⅰ

まずは身仕舞いのための本棚整理。やっと本を読める境遇になった。読まされた本の数々、これぞ「言語の力」。それは日本人の特質と思われる繊細さから表わされた東洋と西洋の長いながい歴史からの〝知〟の集積。数々の翻訳や解説の中から―。

音楽と美術（色彩・彫造・造形）の影響の濃い私には、特にリズム感のある文章（講演記録から論考）からは確かな感動を受け吸収も早い。加えて書き手の生き様―その直感からの言葉―の精神と知識が一つに

なってこちらの心に響く。手軽に入手できる文庫から、ほんの一部を記す。

・小林秀雄『常識』（角川文庫）の中のデカルト『無常』『モオツァルト』etc.
・夏目漱石『私の個人主義』（講談社文庫）の五つの講話録
・三木清　『人生論ノート』（角川文庫）
・幸田露伴『努力論』（岩波文庫）

幸福論と宇宙論は特に好きだった。東洋の倫理観も含めて、どんなに難しくても日本語であれば、こちらの胸に響き修まる。

かつて私は「情緒表現」と「動作」は無垢な幼児期に素晴らしいものがあり「舞踊」の素をそこに見た。しかし、本質的な舞踊の形を作り出すためには「言語の力」を一つひとつ肉体に通す作業の必要を実感した。その方法を『イカルスのように』（P.110 ～P.158）に書き出版した。本を書いたのは、自分を知るためであった。

今、先達の思想を言語でしっかり把握できたことは、私にとって即『イカルスのように』の検証に繋がった。

母の生まれた明治時代から昭和に生きた稀有な先達たち。合理主義の功罪を予見していた人々。かつて私の師、野口晴哉師（1911-1976）、小辻誠祐博士（1899-1973）がそうであったように。エミール・ジャック＝ダルクローズ（1865-1950）が、イサドラ・ダンカン（1877-1927）が、気付かせてくれたように。

全生涯をかけた人々の言動を受けた。

特に、自己訓練―自分の心に入れたいものだけが判断の材料。その基本的な「知の種」をどこまでも育てる信念と身体の動きに固く結ばれた情念と動きをどう観察監視するか…。

「三木清」（1897-1945）というヒューマニズム。

普遍性に通じる筈だ、と私は信じる。

# 言語の力II

精神性は最も重要だ！その最も適切な例題として書かざるを得ない。今、生きている私の感覚として、ほとんど友人だと思えるほどの親近感を抱かされた人、姜尚中（カンサンジュン）（1950-）の著書。集英社からの新書、文庫の数十冊。そして友人でもある道下匡子（きょうこ）（1942-）。

・『イノック・アーデン』アルフレッド・ロード・テニスン（1809-1892）著（道下匡子訳）（愛育社）

・『ダスビダーニヤ、わが樺太』　道下匡子著　（河出書房新社）

七十年経っても返還されない樺太（からふと）出身の道下匡子。母親は一〇八歳で身罷（みまか）れた。その母親に読んで欲しい！と翻訳したという美しい日本語訳『イノック・アーデン』本文もあとがきも素晴らしい！

・『生きるということ』エーリッヒ・フロム（1900-1980）著（佐野哲郎訳）（紀伊国屋書店）

この様な貴重な本こそ、ここまでの思想を書いてあるものを見れば、私の考えを書く必要などなかった！と思う程の思いを身に染みて感じた。フロムは学生時代の教科書であった！　という人の言葉。しかし、学術的（日本の大学の教科書の様な存在）であっても、現状との違いに驚くばかりである。

これぞ「言語の力」に満ちている。

# 言語の力 III

古代からの人の営み。その流れの反映。その全貌は難しいが、私の貧しい学びからだけでも普遍性が明確に受け取れる。自分流に生きた過去の検証としての収穫が、私にとって大変に大きかった。特に八十歳を過ぎてから触れた書物、わずか数冊だが、

かのショーペン・ハウアー（Arthur Schopenhauer）（1788-1860）

・『孤独と人生』（白水社）（金森誠也訳）
・『存在と苦悩』（白水Uブックス）（金森誠也訳）
・『随感録』（白水社）（秋山英雄訳）

周知の、エーリッヒ・フロム(Erich Fromm)(1900-1980)

・『生きるということ』（紀伊國屋書店）（佐野哲郎訳）
・『愛するということ』（紀伊國屋書店）（鈴木晶訳）

どうしてもここに書かざるを得ない。翻訳者の頭脳も素晴らしい。驚いて何回も、何回も読み返す。その度に理解度が深まる喜び。

戦前の三国同盟（ドイツ・イタリア・日本）そして敗戦とその構図。一世紀も前の西欧の社会制度の構造が、過激なショーペン・ハウアーの記述からはっきり判った。人の思想、その考え方の明確さに納得の度合いが増した。それを功罪共々、そっくりうけた日本。そして敗戦後のアメリカナイズも…。

しっかりとこの目で見た。

小・中学校の頃から身に受けた私の現実―貧困と思想で自殺した友人数人。そして多くの若者の死。特に純粋な若者の多くが挫折し去った記憶は生々しい！

「神風特攻隊」「オウム真理教」「統一教会」そして二十一世紀のディクテーター(dictator)たち…。

「言語」は解釈を誤れば大きく正負に傾き、危険極まりない！　身近にある「自尊心」―権威主義に始まり劣等感から諦観（あきらめ）・嫉妬（しっと）・卑下（ひげ）に陥りやすく変質する現実は周囲に溢れている。「普通（ふつう）」という語も大差をおこす。何を持って「普通」とするか？　東西の宗教もすべて含めたこの二人の思想家の説は、実に素晴らしい！

「空」「無」の思想、般若心経とも等しい。

## 「老いる」ということII

「老いる」ということの驚き。ときの経過の凄さ。体験の幅が拡がり、受け得たその収穫。そして衰退する精神と肉体の現実。それと全く反比例である外界の現象は、テクノロジーのめざましい発展。世界を上げての変容のさま…。

版画、書籍の印刷術から映像、録音技術の成果がもたらしたSONYからアップルコンピューター。アインシュタインとインドのガンジー、

そして日本の版画と陶器に憧れたというスティーブ・ジョブズ（Steve Jobs）（1955-2011）の感性。その恩恵に酔いしれている間に、あっ！という間のチャットＧＰＴ。一九六〇年代初期にＮＨＫ芸術劇場のテレビ番組で初めてのモダンダンス上映に、自作品『ネペンテス』（1957）と『エレクトラ』（1963）が初出演した。そしてカラーテレビの初出演は、ヨネヤマ・ママコ、土方巽、大野一雄と共に、私はアイヌのメーコ役で出演した。そんな昔も、つい先日のように想い出すのに、変化の早さに圧倒される。東西の思想書も日本

語に訳され、出版され、音楽・美術も世界中を巻き込み、この時代の急速な発展は実に目まぐるしいほど。

良い時代に恵まれた！　という実感でもある。

## 「老いる」ということ III

「私への質問は今日限り…。」と云ったという老民族学者の言葉、老いを自覚した人、すごい！

未だに結論を出せないでいる私自身。その焦りが、今書くことにのめっているのか、あるいは生前葬やコンサートはしないが、せめて会葬御礼は自分で、と逢えないままでいる多くの友人と仲間だった人々に「ありがとう」「さようなら」を云いたい！ その意味も確かにある。

また、古今東西の人々の死も見つめてきた。その日、その時、そこまでの在り方を思うとき、たとえ高望みであろうとも、私の理想を追う努力はしたい！

宮沢賢治の湯灌（ゆかん）のように！　幸田露伴の「もう逝くよ！」のように。そしてロックフェラーのミルク瓶のように。

母と祖母の「眠りたいの…」のように…。

## 回　避

「あーあ！ここまで来たかー」

コロナや戦争がなかなか治まらない。そこへイスラエルとパレスチナ問題が、幾度かの繰り返しで突然始まり、国連周辺の夥(おびただ)しいデモ隊。窓下の通路は人々で埋め尽くされる。

ふと、日本の歌番組を見れば、一糸乱れずグループでテンションの強いユニゾンのダンスの流行。どれもこれも同じだ。背筋が寒くなる

程のミリタリー調のユニゾンの動きの型。これはかつての戦争前の記憶にもあった。昭和一桁の目にはヒトラー時代のドイツの高名な舞踊家達の戦後の没落も見ている。私の脳裡は俄に世相の怖さを身に浴びる。戦後の乱れ咲くセックスアピールの流れを懸念していたが、ミリタリー調が加味した今回のもの。

目新しいもの、進歩的と言われるものがどれ程大切なのだろうか？

教育関係のクラブ活動も、その傾向は大変に危うい。都立の有名高校の名前までテレビに紹介された。自由主義の倫理観の危機がここまで迫っている怖さ。遠い昔「ゆく河の流れは絶えずして…」河の流れどころではなく、宇宙の流れも大移動しているのだろうか。

オリンピックの種目に加わった「ブレイキン（ブレイクダンス）」正にこれこそ今や現代舞踊（モダンダンス）の代表格。ダンスが庶民のものになって十数年。人の体が遂に物質化された。舞踊芸術も貨幣価値の世の中では

堂々たるショービジネス。心のふるさと＝先祖供養の盆踊りも町おこし、村おこしの比重が目立つ。

「チャットＧＰＴ」いよいよ記者、作家の受難も始まった。知る限り明治からはじまったテクノロジーの進歩によって、どれほど多くの人間たちの職業の変転があったか？

私の身の廻り、兄弟たちもカメラの素晴らしい発達のため転業した。カメラ・ＴＶ・映画 etc. ダンス教師も生徒も学校のビジネス化、プ

ロモーション化。（コンテスト、チアリーディング、クラブ活動）。国立、市立、入り乱れての予算割当競争。全ての宣伝競いの匂い濃厚。近代メカニズムに押されて美術館、博物館、図書館はどのようになるのかー。人の遺産は？　伝統は？

どの国でも神に捧げることで始まった「舞踊」。オリンピックもルールを作って戦争回避に役立っていた筈（はず）。精神的な思想は片隅に追いやられた。精神性のアーツが少しでも残るうちにこの世から翔び去りたい！と。普遍性（ユニバーサリティ）を知り、私の信じたアーツを見極めたい！

私の信じたアーツを！

音楽も様々に変容、特にＴＶで知る限り、コンサート形式も大きく変わり、かつての舞踊（ディスコ流行）と同じように歌声酒場から一段と変容し、大型の劇場や野外劇場に詰めかける大群集の形式。共に歌い踊り叫び―全て庶民のものになったのは素晴らしいが、大音響と共に荒れ狂うスター達と共に大群集の狂乱。

ふと、燃え盛る戦火のように感じるのは、やはり私が老齢になったからか…？

美しいより楽しむより、怖い思いが倍増する。

## 考える

「どうして数があるの？」「どうして四捨五入しなければいけないの？」子供の私は、ついに「どうして踊るの？」体の感覚度合いを確かめるため、零（ぜろ）の価（あたい）の周辺の微妙な数値がとても大切だった。欲望の重さも測り、行動の目安も立つ。しかし「零」という謎は今でも解けない。「無」と「空」のように―。

人間が作り出した「数学」もすごいが「神」はもっとすごい。

子供に質問されたら「神」をどう説明するか？　山と積まれた本？概念？　人の受け売りで済むか。日々の行動も自分の生きる道も決まってしまう。圧倒する自然の脅威と美しさの中で「神」と「悪魔」、そして「生きる」「死」「愛」をどう考えるか？

「考える葦」と誰かが云った。ギャンブル的な芸やスポーツの充満する昨今。多様にある「考え方」の中で―。ブータンやインドネシアの「トリヒト・カラナ」もこの世に存在する人の世。

## 眠る

起きている時と眠っている時を繰り返す人間の毎日。メカニズムは判っても不思議さは一向に判らない。「零」という数字の魅力。

自分がすーっといなくなる。そしてすーっとまた現れる。その狭間に注意したとき、現れ出るもののあることを発見。それは私にとって、とても大切なものであった。（『イカルスのように』参照）。

あーっという間に膨大な時が逝ってしまった。夜毎（よごと）の眠りは、きっと「死」の練習かも知れない—と思う。

眠くなったとき、横になりながらチラッと横目で時計を見る。しかし、起きた時、それを覚えていない？残念。しかし私は新しい遊びを発見。起きたときのデジタル時計の数字。その組み合わせの文字。必然か、偶然か？　丁度、釣れたお魚の姿を見るような楽しみであり、そして新しい一日が始まる。

あらゆる数字の組み合わせ。その数字の並び具合によっての過去の記憶との符号との絡み合いの妙味。

既にこの世を去った現代作家の友人＝河原（かわはら）温（おん）（1932-2014）、彼は晩年にその日の年月日の数字だけの画を描いた。その画はドイツで売れ有名になった。

名前と生年月日と死亡の日付だけが残る墓石。

## 初体験

外気を皮膚一枚で仕切られた人の体。官能とともに時の中で他と（外気、宇宙―男・女・親子・友人）交えることの凄さ。そしてそれが幼児から今の今まで続くのだ！　という事実に九十歳になる私は震えた。

先入観なるものを振り払いながら歩みを進めても、個人の力が整わないうちに人生の時間切れが迫る。自分一人を救うことだけでも重荷。

個人の責任の重さ、周囲は目まぐるしく変わる情報過多。崩れ始めている家庭崩壊。食の乱れ。細菌の威力。戦争。

ふと思う。日本の古武道のメソッドの凄さ。私には男性舞踊手は育てられなかった。また、もし私が〝合気道〟で鍛えていたら、きっとデュエットも踊れ、良い指導者にもなれたと思う。

毎日、私がねじを操作しているノッポの古時計。その穏やかな音が、静かに隣の部屋で鳴っている。

「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」

―正岡子規

ふと、浦島太郎の玉手箱の煙を感じた。

# 代　謝

「インプット」だけではダメで「アウトプット」しなければ判ったことにならない！」と知の巨人＝立花隆教授が言った。確かに発言や行動のエネルギーに替えて試さなければ何事も成り立たない。知っているだけでは半分にも満たない。また、「知」の詰め込み過ぎは、大いに毒になり反作用も起こし、益々肉体は鈍り動けず、宝の持ち腐れも起こし、そのまま老いる。

「食物」も全く同じ。その「エネルギー」の代謝も全く同じで、老廃物が体内に溜まれば悪さをする。「代謝」の大切さは頭で判っただけでは全く解決せず、「代謝」の責任は、各々の毎日の生活にかかっている。

病院の集まっているニューヨークのイーストサイド一番街は、歩行器と杖とそこに横付けする車で賑わい、怖い思いがよぎる。

知の巨人＝立花隆（1940-2021）教授の仕事は、私が云うまでもないことだが、遠く離れたニューヨークでも私はたった二冊の本から大切な恵みを受けた。

・『脳を鍛える』（新潮社）

・『天皇と東大』（文芸春秋社　上下巻）

## 順礼

お一人で四国順礼をなさり、舞台から引退の身を瀬戸の海に入水され、この世に戻られなかった名脇役者＝八代目市川團蔵（だんぞう）翁のニュース（徳島新聞　昭和四十一年）。「舞台から去ること」と「この世を去ること」の意味を過大に関係付けて考えていた三十代の私は、予感していたことが現実だったことに震えた。

五十歳という数字に驚いた私は、慌ててお四国に飛んだ。團蔵翁の写真と祖母の集印帖（母が私を身籠った昭和七、八年の）とを携えて

友人・岩田友江さんと共に。時は弘法大師御遠忌（ごおんき）（千五百年）、特別な年だった。

海と山のせめぎ合う地形―八十八ケ所の霊地。まるごとそこに入ってしまい、そこに在り、歩くだけの私だった。初めて顔を合わせた者同士いっしょの生活。その地に生まれついた人々と会話。人の素直な在り様が身に沁みた。

山あり、谷あり、荒磯あり、田んぼの畦道(あぜみち)のレンゲ、たんぽぽ、スズメノテッポウー。聖地特有の〝気〟の力は冷たく透き通るものばかりでなく、ピンク色に凪いだ春の海、岬の寺、賑やかなその門前町にもうらうらと〝気〟が満ちる。

眼に止まる風景も「はっ！」と声を上げるほど心象風景と一致。雪模様の雨もいつしか過ぎ、境内に入ると完璧に思える処に太陽が輝いていたりすると、まさに異次元に立たされ、ただ思いは遠く、かつてここにこうして立った人々に重なる。

パフォーマンス中に起こる感覚が日常に―。それがあまり鮮やかだったら、もう舞台芸術など色褪せる。旅が進むにつれて、身も心も軽くなり、食事の量が目立って少なくなり、感覚も洗われ、光や大気の音を聴き取れるような気さえした。

その後、数年間、再び三度（みたび）、四国と四国紀州を歩かせてもらった。大和三輪明神と高野山での水行。お写経も続けた。東京に戻り、ニューヨークに帰っても太祖や祖母に導かれたあの時の体験は、細胞の奥深くにたたみ込まれた。

## 梅の忌

梅香り　父も逝き　母も逝き
黄梅の　冥府の里に　思い寄せ
梅散りて　梅の字残し　父と母

（黄梅院）（梅珠院）

梅の季節に生まれた私。そして梅の季節に私は父母を亡くした。
母の忌に突如、この句が出た。小学六年生以来のこと。

人は誕生した季節に亡くなることが多いと聞く。宇宙の気流のうねりであろうか―図らずも父母はその例であった。

今日来(こ)ずば　明日は散りなむ　梅の花

―良寛

遠い昔の話―　ある日父が母を呼んでいた。その時、聞こえないでいた母の側に行って私が「『喜代』、『あなた』が呼んでるよ！」と耳元にそっと教えた。幼く無垢(イノセント)だった私の話…。その母の声、父の声―。

## おひな様

陽だまりに　思い出あそぶ　桃節句

ひな祭　まゆに残せし　おふり袖

ふるさとの　母のつくりし　ひなふたつ

幼かった頃のあの日が浮かび、突然大泣きに泣いた！　娘まゆのはじめての桃の節句。そして今―。コロナ禍でのお雛祭りも五十歳を過ぎた娘とその母を偲んで、お雛様にお出ましを願った。

友人と草を摘んで、餅つき器で草餅を作った娘たちの小さい頃も懐かしく、六十年来の親友＝ミチコ・ノイフェルト。二人とも九十歳のニューヨークで、お雛様の日に久々に逢った。それぞれに用意したのは、既に既製の大福草餅。コロナ禍はすべてを変える。

「また逢いましょうね！」思わず抱き合ったが、二人とも体が小さくなっていた。

# セーフティ・ブランケット

思い出のあれこれ…

ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で唄うイタリアのテナー歌手＝ルチアーノ・パヴァロッティ（1935-2007）。大きな、太っちょのパヴァロッティ！声も素晴らしいが、チャーミングを絵に描いたような彼。そしていつも決まって手には大きなナプキン状のハンカチーフを握っている。ふと横を見ると、小さな娘まゆがいつも握っている布地によく似ている…夫ウォーレンと笑ってしまう。

その夫ウォーレンと息子サムも眠くなると仕切りに手掌(てのひら)でシーツを擦(こす)る。そういう私は右手の甲でシーツを！　今も続いている無意識での行動。絹地と羽毛の抱っこ枕があるともっと嬉しい！娘まゆも真似して抱っこ枕を欲しがった。このセーフティ・ブランケット！

フロイトやユングの西洋心理学もやはり近代日本の恵み―。

その恩恵―良い時代に生まれた！

## 仕草（しぐさ）

ニューヨークの街角でバスを待つ。一つ席が空いていたので、私はそこに腰を下ろした。すかさず隣の人が「アー　ユウ　ジャパニーズ？」

「今、会釈して坐ったから…」とその人が云う。

「あっ！」そう云えば、東洋人の中で日本女性を見分けるのは「足を見れば…」と夫ウォーレンがそーっと私の耳に囁いた。

「ダイコン足？」そうそう、正坐をするのは日本人だけ！

ヨーガの「金剛坐（こんごうざ）」を正確にしないと…その形になる。私は調べた。日本人だけの悲劇。

証拠は既に明らかだ！　生活様式と食事（西洋式）の変化。日本の若者は今、悠々と西欧のバレエ団で踊っている。長～い脚を欲しかった昔を思い出した。

## 「椰子の実」のうた

小さな手がボタンをはめ靴を履く。テレビの幼児番組を見た。なるほど…今、私は同じことを心掛けている。何でも自分で出来るように—練習を思いながら。

バスに乗る、買い物をする、レストランの支払い、全てカード一枚で。しかし医者とスポーツクラブは入り口でコンピューターのレジス

トレーションになり、大変だ。チカチカする小さい文字に、自分の指が正確に動かない。

便利な筈(はず)のコンピューターは使いたくない。打ち込みではリズムが違い過ぎて文章にならない…手書きに戻した。おかげで重い大きな辞書が老眼鏡と拡大鏡と一緒に座右の必需品に並ぶ。

多くの師、知人を見送った今、体力と知力の衰えをしっかり見定めるために、今も生きているのか―。

「名も知らぬ　遠き島より…」島崎藤村のあの唄『椰子の実』。

小辻誠祐博士がよく口ずさんでいられた…私も大好き。

でも、もうこの唄は私には唱えない…。

## 折衷（せっちゅう）

「ひぃ、ふぅ、みぃ、よぉ、いつ、むぅ、なな、や、ここ、とぉ」

「イイ、アール、サン、スゥ、ウゥ、リュウ、チイ、パー、ジゥ、シィ」

たまらなく好き、この音の響き…柔らかさが身に沁み、自然な呼吸の音だ。無垢な子供の笑顔のように―。そして子どもの「言葉遊び」

いるか　いるか
いないか　いるか
いない　いない　いるか
いつなら　いるか
よるなら　いるか
また　きて　みるか

―谷川俊太郎

私は東洋人に生まれて良かった、と。

世界中が危機迫る昨今。見仕舞いのための本棚整理中、夢のような小さい贈り物。子育ての頃、息子たちと一緒に使った絵本数十冊とピアノ教則本二冊。美しい小さい曲ばかり（ヘンリー・パーセル、アルカンジェロ・コレッリ、バッハ）

「いずれの花か　散らで残るべき…」世阿弥

「願わくは　花の下にて春死なむ…」西行法師

良寛さまの「散る桜　残る桜も　散る桜」などなど。合わせて唄うと不思議に似合い、よく唱っていたのを俄に思い出した。学生時代に諦めたピアノ、そして約束していた義娘（ドウターインロウ）の急死。そのために手放したピアノ。

それから六年経つ。動かなくなった指と声（呼吸法）の練習のためにもう一度やってみよう。コロナ禍の日向ぼっこのように。

## 夢は枯野を…

この数年、同じ夢を何回も繰り返す。白っぽい銀色に満ちたすすき野原…京都の周辺らしい。街に出たい！　しかし、どうしても出口も方角も判らず、迷って困って焦って、とても怖い。この夢の繰り返しは暗示かと？　自分が自分の中での迷い子？

「旅に病んで　夢は枯野をかけめぐる」　　―芭蕉

この句をとても好きなので、こんなことになるのであろうか。

## 醍醐味

「おやすみなさーい」ベッドに入り、あっ！　このまま眠ってもいいのだ…と思うときの醍醐味。また、うとうとしている春の気分も素敵だが、うつらうつらして居眠る夏の午下り。あのめくるめく睡魔に襲われるときの心地よさ。

しかし、こんな感覚を味わえるのは、忙しさに追われていた若い時のもの。今はうっかりしていると気付かない間に眠ってしまう。

まぁ、勿体ない！あの強烈に感じた睡魔の到来のような醍醐味は、もう味わえないでいる。

素早い動きが鈍り、老境に入った私。この世の仕組みの全ての役割（振付、演出、踊り手、妻、母親）からの解放された今。この解放感はずば抜けて素晴らしく、幼い頃の、あのうらうらした日々に戻ったよう。今まで随分と自由に振る舞ってきたと思うものの、「あのフリーダムはこのことだ！」という実感に驚嘆。七十代には判らなかった答えも与えられる思いの昨今。初めてゆっくりと読書を出来、自由に

考え、過去の検証（ダンスのこと、愛とは、恋とは、夫婦とは、人間とは）と、老いの行く末にもたっぷりと集中できる時間を持てた。

## そして　今…

私はどのように在りたいのか？考え続け、動き続けて遂に九十年も経った。戻れない処に翔んでしまう怖さをからだが感じたくて創り、踊り続けてきた。

今、目の前に「白道」を疾走するか、ゆらゆらするか、踊りながらか、思案中。

私は常に考える。冥界に続くであろう、歩みの終わりの道すがらにどんな音が聞こえるのだろうか…。イスラエルに吹いていたあの風も聞こえるだろうか…。

夜ごとの眠りに満ちる刻の中で、私はいつも決まって最後まで残る聴感覚を、かすかにたどる。

二〇二五年四月

三条万里子

著　者　三条万里子 さんじょう・まりこ

製作者　さこう かよこ

発　行　二〇二五年四月

夢は枯野を…

発行者　Mariko Sanjo Cavior [New York]
https://marikosanjo.wixsite.com/sanjo

参考文献　三条万里子著
『イカルスのように』21世紀BOX

TO READ MORE
『よだかの星のように』『鳥』『一人のための
デュエット』『VOICE』『足跡をたどる』